

令和 7 年 1 1 月市長定例記者会見

日時：令和 7 年 1 0 月 3 1 日（金） 午後 2 時～

場所：射水市役所会議室 3 0 2

報道出席者：北日本新聞、富山新聞、北陸中日新聞、読売新聞、朝日新聞、

北日本放送、射水 CATV、庄東タイムズ・ホットライン小杉

当局出席者：市長、企画管理部長、財務管理部長、企画管理部次長

観光まちづくり課長、防災・資産管理課長、教育委員会事務局次長

Q 1. 高市政権に期待することを教えていただきたい。

A 1. 先日、高市政権が発足し、日経平均株価が 5 万円を突破した。これは、積極財政で経済再建を目指すことへの期待感が高まっている結果と思われる。地方の立場としても、経済の立て直しに期待しているが、物価高・エネルギー高が市民生活や企業経営に深刻な影響を与えている状況に対する対策をお願いしたい。また、少子高齢化や人口減少が進む中で、地方創生の取組をこれまでも進めてきたが、効果的な事業を今後も継続していきたい。市町村だけでは財政的に厳しい中、人口減少に立ち向かい、持続可能な地域づくりのためご支援いただきたい。

Q 2. 海拔表示看板について、具体的な設置位置を教えていただきたい。

A 2. 海拔表示看板は、市の沿岸部に設置している。沿岸部の西側では新湊や放生津、東側では堀岡や海老江を中心としている。具体的には、浸水深 1 ～ 3 m の看板は新湊、放生津、堀岡、片口、七美、海老江の地区で合計 1 4 か所、浸水深が 0. 5 ～ 1 m は庄西、新湊、放生津、海老江、片口、七美、本江、下、大江の地区で合計 3 2 か所、浸水深 0. 5 m 未満の看板は庄西、新湊、放生津、堀岡、海老江、片口、七美、本江、大江の地区の合計 4 1 か所に設置している。

Q 3. 県内自治体、初の試みか。

A 3. 海拔表示看板については、ほかの地域でも設置されていると思われる。

ただし、津波の想定される浸水深まで掲示しているかどうかは、正確に把握していない。

今回、看板の形状を決定する際、職員へのヒアリングや市内の防災士からの意見を参考に、より訴求力のあるデザインとした。

Q 4. 海拔表示はよくあると思うが、津波の浸水想定まで示したのは射水市独自のアイデアか。

A 4. 正確に把握していないため、担当課に確認いただきたい。

Q 5. 液状化の被害が大きかったのは、浸水深が1～3mのところが多いのか。

A 5. 液状化の被害が特に顕著だったエリアは、新湊の港町地区である。そのほか、新湊市街地においても、被害が見られる状況の中で、津波の浸水深が液状化の危険度と相関性があるかは把握していない。沿岸部ということで、津波の高いエリアが含まれていると思っている。

Q 6. 先日、「ワンチームとやま」にて、射水市を含む5市が液状化対策に対し、住民負担は求めないことを発表した。市長の受け止めや今後について教えていただきたい。

A 6. 先日、「ワンチームとやま」に先立ち、液状化の被害があった県内5市（富山市、高岡市、氷見市、滑川市、射水市）の市長と新田知事による意見交換が行われた。各市における液状化対策のこれまでの取組と現状、今後の方針について意見を述べた。共通の課題は、液状化対策として導入を検討している地下水位低下工法において、住民負担をなしにしなければ住民の同意を得られないことだった。県が維持管理や長寿命化に関する経費の支援を発表したことに対し、感謝し、これらを踏まえ、液状化対策で地下水位低下工法を導入する場合は、住民負担を求めないという方向性で一致した。この方針をそれぞれ発表するのではなく、「ワンチームとやま」において、氷見市の菊地市長が代表して発表した。

今後について、射水市は、地下水位低下工法の実証実験に向けた準備の工事を進めている。見込みでは、12月から実証実験を開始し、来年春ま

での予定である。地下水位低下工法の効果を確認し、周辺への影響がシミュレーションの範囲内に収まるかを検証する。また、実際にかかる経費について積算を行い、その結果を地域住民に説明する予定である。射水市は以前から、住民負担について、負担ゼロを含めて可能な限り軽減するとの方針を示しており、住民負担を求めないことで5市での合意に至った。試算をした上で、場合によっては、新たな課題が生じる可能性もあるものの、基本的には住民負担を求めない予定である。

Q 7. 道の駅について、名称だけではなくハード面のリニューアルはあったのか。

A 7. 道の駅については、ハード面でのリニューアル工事を進めてきた。元の道の駅に加え、北側にあった「農村環境改善センター」を一体的な施設として新たにオープンする計画である。また、道の駅と農村環境改善センターの間にあった従来の市道も付け替え工事を実施し、自由に行き来できるスペースを確保した。本館と別館という形になったが、これらを一体的に楽しむことができ、さまざまな取組ができるエリアとしてリニューアルオープンする。